

正文にデンワする日々

山田 正文（福岡県北九州市／61歳 男性）

夜中に電話をして驚いてはいけなから切り通しの坂の上に車を止めて、街灯のない細道を妻と走った。

「寝巻に着替えて眠る時に、必ず携帯に電話してね」と約束していたから、待っても電話のない時は、胸騒ぎがして車に飛び乗った。曲がりくねった道の向こうにある、母の家のガラス窓の向こうに母の寝床の明かりが見えると、ほっとしてそのまま今来た道に戻った。

携帯に電話をして切るだけの約束。携帯が鳴り、母からの着信番号を見ると、その夜の無事を確認できた。悪性の病で入院中、転倒して大腿骨を骨折：術後の不具合により自力歩行ができなくなり、一時退院後も家の中の車椅子での生活。ひとりで暮らせる間はひとりで暮らしたいと言うので、毎日仕事帰りに寄って帰り電話の着信を待った。

母は小さなときから苦勞をしてきて、結婚してからも酒飲みで家にお金をまともに入れないう父と喧嘩してはいつも泣いていた。はだして裏の畑に飛び出した母のために、父が寝入ってからそっと鍵を開け、下駄を持っていくと僕を抱きしめてくれ、「いつもあんたの頭を涙で水浸しにしてきたのに、あんたが素直に育ってくれてよかった」と、泣きながら頭をなでいつもそう言った。

その父が五十九歳で倒れ半身不随になってから二十数年間、片時も離れず父の杖になり介護で明け暮れた。ぐちもこぼさずに、父に懸命に尽くして見送った後、やつとのんびりできるかと思った矢先、体の異変に気づいた。大病院から派遣され、一年毎に替わる医者「覚悟しててください」という言葉が頭の中を横切る中、奇跡を信じて健康食品、漢方となんでも試した。出勤前、昼休み、仕事帰り、いつも病院に行き、副作用で食欲のない母に少しでも何かを食べさせようと食べ物に運んだ。

今ではもう母のいない実家の冷蔵庫に「正文にデンワすること」と書いた紙が今でも貼られている。電話を忘れて心配をかけたため目につくところということで冷蔵庫に貼っていた。その紙を見るたびに、あの日々が昨日のように思い出される…。

母さん、天国からもう一度僕に電話をして下さい。
着信だけでなく、声を聞かせて下さい。「あんたが思っているほど母さんは不幸な人生だったと思っではないよ」と言っって、安心させて下さい。

奇跡が起きて、一時退院して母さんのそばで暮らせた数か月を僕は忘れない。

車椅子に乗り、体力のない不自由な体で、手をべとべとにして作ってくれた朝のおにぎりを！